



## 慶應義塾大学ビジネス・スクール

# 株式会社大地を守る会

5

## 1. 大地を守る会の誕生

1975年、日本は、大量生産大量消費で経済的に急成長を遂げていた。同時に、工場で使われる化学薬品や田畠にまかれる農薬や化学肥料の影響で、公害や環境問題に直面していた。農薬や化学肥料を使うのは、生産者が、省力化・効率化・大量生産を目指していたからである。消費者も、虫食いやふぞろいの野菜はよくないもの、格好悪いものと避けるようになっていたからである。

出版社で働いていた藤田和芳（現：大地を守る会・会長）は、雑誌（サンデー毎日 1974年7月28日号）で見た記事にショックを覚え、記事を書いた医師高倉熙景に会いに行く（写真1）。高倉は藤田に教えてくれた。「農薬は、戦争で使われていた毒ガスと同じ成分なのです。」生産者の中には、農薬の危険にさらされ、手の痺れ、吐き気など神経系の健康被害を受ける人たちもでてきた。藤田は、高倉の紹介で無農薬で野菜作りに取り組む人たちと出会うようになる。

「あなたが食べている野菜に使われている農薬は毒ガスと同じ成分なのですよ。」いくら言葉で農薬の危険性を訴えても、結局何の解決にもならない。それよりも、安全な野菜を作つて食べる生活を広めることができが確実で近道ではないだろうか。「農薬の危険を100万回叫ぶよりも、1本の無農薬の大根を作り、運び、食べることから始めよう」を合言葉にして、大学生や会社勤めの若者が本業の合間に、都内数か所の団地で無農薬野菜の青空市を始めた。1975年8月19日のことであった。当時の生産者は300名ほどである。無農薬野菜を作つていている人たちから分けてもらう野菜は消費者が嫌がるはずの虫食いやふぞろいだったが、「昔の野菜の味がする」「元気で美味しい」と大評判であった。

食べるとはどういうことを意味するのであろうか。食べることはいのちの源である。食品は命をはぐくみ、命をつなげてくれる。人間は、空気、水、太陽、森林という自然の恵みなくして食

---

本ケースは、クラス討議の資料とするために、法政大学経営学部 木村純子准教授によって作成された。経営管理の巧拙を記述したものではない。

本ケースは慶應義塾大学ビジネス・スクールが出版するものであり、複製等についての問い合わせ先は慶應義塾大学ビジネス・スクール（〒223-8526 神奈川県横浜市港北区日吉4丁目1番1号、電話 045-564-2444、e-mail: case@kbs.keio.ac.jp）。また、注文は<http://www.kbs.keio.ac.jp/>へ。慶應義塾大学ビジネス・スクールの許可を得ずに、いかなる部分の複製、検索システムへの取り込み、スプレッドシートでの利用、またいかなる方法（電子的、機械的、写真複写、録音・録画、その他種類を問わない）による伝送も、これを禁ずる。

Copyright© 木村純子 (2008年9月作成)

10

15

20

25

25

30